

第四十八回「全日本中学生水の作文福島県コンクール」入賞作文集

水について考える

主催 福島県

後援 福島県教育委員会、福島民報社、福島民友新聞社、
NHK福島放送局、福島テレビ、福島中央テレビ、
福島放送、テレビユー福島、ラジオ福島、ふくしまFM



「健全な水循環」

ロゴマーク

挨拶

水は、あらゆる生命を育み、多様な生態系を維持するとともに、大地に豊かな実りを与え、多彩で美しい自然環境をつくりあげるなど、私たちの生活には欠かすことのできないものです。

また、水は限りある資源であり、私たちの豊かな生活を維持していくためにも、水環境を守っていく必要があります。

本県には、猪苗代湖や裏磐梯湖沼群をはじめ、各地に豊かで美しい水環境があります。代々受け継がれてきた地域の宝を守り、後世に伝えていくことが重要です。

県では、水に対する関心を高め、一層の理解を深めていただくことを目的に、八月一日の「水の日」及び八月一日から八月七日までの「水の週間」における行事の一環として、「全日本中学生水の作文福島県コンクール」を昭和五十四年から毎年実施しています。

四十八回目を迎えた今回は、県内の中学生から五百三十八編の御応募をいただきました。

令和元年に発生した台風十九号での経験や、御家族から聞いた東日本大震災の話を通じて痛感した水の大切さ、学校での活動や日常生活を通じて感じた水に対する思いなど、中学生の皆さんが、貴重な財産である水としつかり向きあつて真剣に考えていることが伝わってきました。

読者の皆さんには、この作文集を水について考えるきっかけとし、身近にある美しい水環境を将来に受け継いでいく貴重な人材となつていただけるよう願っています。

結びに、今回の作文コンクールに応募された多くの中学生の皆さんや担当の先生方に心から御礼を申し上げます。

令和八年八月

福島県企画調整部長 市村 尊広

目次

(作文は、各賞ごとに作者名の五十音順で掲載しています。)

優秀賞

正しく知る為に水を熟考する	・ ・ ・ ・ ・	郡山市立大槻中学校	二年	桑名 優空	1
三百リットルの無自覚	・ ・ ・ ・ ・	矢吹町立矢吹中学校	三年	鈴木 ころろ	2
当たり前の奇跡	・ ・ ・ ・ ・	矢吹町立矢吹中学校	三年	高橋 寛輝	3
池の中のメダカ	・ ・ ・ ・ ・	会津若松市立第六中学校	三年	永井 花歩	4
猪苗代湖の未来のために	・ ・ ・ ・ ・	福島県立会津学鳳中学校	二年	渡部 心寧	5

入選

水と心のつながり	. .	会津若松市立第六中学校	三年	佐藤 胡糸
姿を変える水	. .	矢吹町立矢吹中学校	三年	須藤 旭
生活に欠かせない水	. .	いわき市立植田東中学校	二年	橋本 陸
水と共存する私たち	. .	いわき市立平第二中学校	二年	緑川 華
強く美しい川	. .	会津若松市立第六中学校	二年	皆川 叶磨
米づくりと水	. .	柳津町立会津柳津学園中学校	三年	渡部 栞帆

優秀賞

正しく知る為に水を熟考する

水を考える時、私は幼少期に暮らしていた豊かな自然の故郷を思い出します。だからこそ、誰かの大切な故郷を大きく変えてしまい、復興のため必要だった水について皆にも考えて欲しいと思うのです。

私は、湖南町という美しい町で育ちました。あの頃は母に連れられ、猪苗代湖と磐梯山をよく眺めに行き、その度に心が澄んでいく感覚がしたものです。冬の凍える寒さを飛ぶ白鳥のV字、雪解け水が小川の縁のナズナやホトケノザを芽吹かせるのも、夏の湖水浴も青々と風なびく田園風景も、秋の五色の山々も脳裏に焼きついている大切な思い出です。

二〇二五年の夏、毎年楽しみだった蛍が見られませんでした。自慢だった家の前の小川が、河川改修工事でコンクリートに整備されたことと、猛暑が重なったことが原因ではないかと考えられます。同じ年、猪苗代湖はラムサール条約という国際的な約束に登録されました。これは、水辺の環境を守り、そこに生きる動植物を大切にしようとする約束。この条約がもつと早ければ、この小川の蛍も保全がされていたかもしれないと胸がズキリとしたのでした。湖南に帰れば当たり前に蛍が見られると思っていたので、環境一つで変わってしまうと改めて水について考えるきっかけとなった出来事でした。

そんな折、「処理水」という言葉をよく耳にするようになります。今までの私であれば心に留める言葉でなかったと思います。私が暮らす福島のことなのに、私たちには無関係だと感じていたからです。福島子ども未来塾という体験活動へ参加した時のことです。東日本大震災を経験していない私たちは、どこか他人事のように話を聞き始めたのですが、経済産業省の職員さんから、ALPS処理水について子どもたちの私たちでも分かるよう丁寧に教えていただく機会がありました。ALPS処理水は、あの震災・原発事故でできてしまった燃料デブリを冷やし続けなければならず、その中で生じた汚染水を、ALPSという装置でろ過を繰り返し返

郡山市立大槻中学校 二年 桑名 優空

し処理した水のことです。この処理水は、国の基準よりもWHOの世界基準よりも大幅に希釈され、安全に放出されています。近海の水産業に影響が出ないようにと、IAEAが監視をしてくれていると知りました。『処理水は危険な汚染水』とイメージしていた私はこれ以上福島を汚さないで欲しいと思っていました。事実を知ると見ていた景色が変わったのです。あの日、熱心に漁港で話をしてくださった漁師さんたちの笑顔と、皆で食べたホッキ貝やヒラメの味は忘れられません。

同じ福島の水。これから保全される環境の水と、海洋汚染だと危険視され、さまざまな場所で正しく理解を得られるよう情報を発信し続けている水。私はどちらも重要な水で、学び関わり続けたいと思いました。

猪苗代湖は、水質日本一に四年連続で輝いたことがあります。それは、流れ込む河川の酸性の水が湖水の汚れや窒素リンを湖底へ沈殿してくれる働きをしていたからだと調べて知りました。中性化した現在、地元の皆さんでヒシ等の水生植物を刈り取り、生活用水の流入を気を付けていることも。この猪苗代湖を思うように、双葉郡の人々や海を生業にしている人々にも、豊かな自然と親しんだ故郷の大切な記憶がある筈なのだと強く感じます。復興と廃炉の過程でどうしても必要だった放出という選択。目をそらしたり、誤った情報に惑わされず、逆に正しい情報だと過信せず、福島の水について関心を持って熟考していきたいです。これからの福島をつくるのは、私たち若い世代です。正しく知り伝えたいです。

あの夏、双葉町では実証栽培の為に田んぼでたくさん蛍が舞っていたと聞きました。故郷を思う心と未来を、前向きにする光です。

優秀賞

三百リットルの無自覚

私たちにとって水は当たり前の存在だ。洗面所で手を洗う時、トイレを流す時、お湯が沸く時、これ以外にもたくさん生活と水は身近に深く関わっている。水は当たり前の存在。だからこそ私にとっては無意識な存在だ。これまで水一滴の価値や行方について真剣に考えたことがない。水は私の中で無意識な存在であり、私は水のありがたさや大切さという実感がなく無自覚だった。

しかしある日、目にした三百リットルという数字が私の無自覚をなくした。日本人が一日に使う水の量。これは、二リットルのペットボトル約百五十本分、五百ミリリットルペットボトルなら六百本分に相当する。無意識に使っていた水が私の指先一つで毎日消費されている。その事実を知った時私は自分の無自覚さが恐ろしくなった。私が無意識に流し去っていた三百リットルの水には実は多くの人々と守られるべき未来が詰まっているのではないか。

私は、自分の中の無自覚を破り水という存在と向き合うことに決めた。私がまず驚いたのは、この三百リットルという数字が、世界的に見ると一人当たり一日あたりの水の使用量が世界で二番目に多いということだ。日本は一日の平均量は約二百二十リットル、二百六十リットル。それに比べ環境意識が高いとされるイギリスなどのヨーロッパ州の一人当たり一日の水の使用量は百リットル、百四十リットル程度だそう。さらに百リットル未満の国も多くあり、飲料水や最低限の衛生に不足し深刻な水問題に直面している国も多い。私は自分の手の中にある水の重みが、急激に増していくのを感じた。なぜ、私たちはこれほどに無自覚に豊かな水を当たり前に使っているのだろうか。

それを支えているのは、蛇口の向こう側に広がる膨大な人々のおかげであつた。一日中休むことなく水を守り続ける浄水場で働く人たち、地下の水道管を維持するエンジニアの人たち。そしてその根本となる豊かな森を育む人たち。数え切れないほど多くの人々の努力によって水はたくさんの人々に届けられているのではないかと私は思った。

矢吹町立矢吹中学校 三年 鈴木 こころ

そう気づいてから私の日常に小さな変化が起こった。水を出しっぱなしにしている自分に気づくと心の中でドキッとすることがあつた。もったいないという罪悪感だけではなく、私が無駄に流していたこの一滴は誰かが必死に守り抜いた一滴であり、未来の誰かにとって必要とする一滴かもしれないという責任感を感じた。

もちろんすべての習慣を変えることは難しい。水を出しっぱなしにしてしまう時がまだ絶対ないといえる確証はない。理想と現実に葛藤する日々だ。しかし大切なのは、「無自覚」という深い眠りから覚めることだと思う。三百リットルの裏側に隠されたたくさんの人たちの声に耳を澄ませることだと思う。

水は、過去から受け継がれ未来へと渡していく「命のバトン」でもある。今、この時代の豊かさを当たり前と思わず、一滴に込められた物語を聴き続けようと思う。

もう二度と、無自覚に戻らないように。

優秀賞

当たり前の奇跡

水を一気に飲むと、眠っていた体が目覚め、顔を洗えば、肌を引き締めてくれる。

私にとって、蛇口から透明で清潔な水が出ることは、息をするのと同じくらい「当たり前」のことだった。蛇口をひねれば水が出る。それはまほうでもなんでもなく、私の日常のほんの一コマに過ぎない。しかし、ある夏の日の経験が、その当たり前の景色を一変させた。

私はパソコン部に所属し、日々プログラミングや動画制作など、自分の活動内容に取り組んでいる。運動部のように校庭を走り回るわけではないが、夏のパソコン室は意外なほどに体力を消耗する場所だ。何十台ほどのコンピュータが稼働する室内は、排熱によって特有の乾燥した熱気がこもる。冷房が効いていても、ディスプレイを見つめ続ける目は乾き、キーボードを叩く指先からは少しずつ水分が失われていく。ある日のことだ。私は文化祭に向けた作品制作に没頭していた。複雑なエラーが解決できず、一時間、二時間と画面にかじりつく。カチャカチャという乾いたタイピング音だけが響く中、私の思考は、完全にデジタルな世界に閉じ込められていた。

ようやく一つの課題をクリアした瞬間、ふと現実に戻ると、信じられないほどの倦怠感におそわれた。集中しすぎて呼吸が浅くなっていたのか、喉の奥がカラカラに張り付いている。私はたまらず、廊下にある水飲み場へと向かった。蛇口をひねり、勢いよく飛び出した水を口に含む。その瞬間、衝撃が走った。「生き返る」冷たい感覚が喉を通り、熱を持った脳を内側からクールダウンさせていく。それは、フリーズ寸前だったパソコンが、再起動によって再び滑らかに動き出すようだった。味などないはずの水が、どんな飲み物よりも体に染み渡り、エネルギーを補給してくれる。画面の中の仮想的な達成感ではなく、水という「確かな物質」が私の生命を直接メンテナンスしてくれたのだ。この渴きを癒やす

矢吹町立矢吹中学校 三年 高橋 寛輝

喜びを経験して、私は初めて、自分の体がデジタルではなく、水によって動く生身の存在であることを強く再認識した。

家に帰り、私は改めて水について考えてみた。私たちが何気なく使っている水は、一体どこから来ているのか。以前、授業でダムや浄水場について学んだことを思い出した。山に降った雨は、森の土壌によって蓄えられ、時間をかけて川へと流れ出る。その水は浄水場へ運ばれ、いくつもの工程を経て、不純物が取り除かれ、消毒される。そして、くもの巣のように張り巡らされた水道管を通じて、ようやく私の家の蛇口へたどり着くのだ。この長い、旅路の途中には、常に「人」がいる。水源の森を守る人、ダムを管理する人、水質をきびしくチェックする人、老朽化した水道管を工事する人。私たちが寝ている間も、彼らは日本の水を守り続けている。蛇口から水が出るのは奇跡ではなく、数え切れないほどの人々の努力の結晶なのだ。私たちは、お金を払って水を買っているだけではない。多くの人々の「命を守るリレー」のバトンを受け取っているのだと思う。

水は、ただの物質ではない。私たちの命をつなぐ源であり、多くの人々の想いが込められた贈り物だ。そう気づいた今、私にはやるべきことがある。まずは、日々の行動を変えることだ。歯を磨いている間は水を止める。シャワーを出しっぱなしにしない。そんな小さなことかもしれないが、水の向こう側にいる人々に敬意を払う第一歩になるはずだ。「湯水のごとく使う」という言葉が、これからの時代、その言葉の意味は変わっていくだろう。限りある資源を、大切に、感謝して使う。蛇口をひねるたび、私はその向こう側に広がる長い旅路と、多くの人々の顔を思い浮かべる。水への感謝を忘れず、大切に使いたい。

優秀賞

池の中のメダカ

小学校低学年のころ、校庭の池には自然に育ったメダカが泳いでいました。学級で飼っているメダカとは違う野生のメダカでした。自然に育っていたので、エサなどを与えたことはありませんでしたが、メダカが住んでいる池が私はお気に入りでした。

しかし、高学年になってから久しぶりに池の中をのぞいてみると、メダカが見当たりませんでした。「あのメダカたちは、どこに行ったんだろう。」と、今まで特に気にも留めてこなかった水辺の変化が、急に気になり始めました。

私は、あのメダカがいなくなってしまった理由を考え、調べてみました。するとメダカは、水質や水温の変化にとっても弱く、少しの環境の変化でも生きられなくなってしまう、繊細な生き物であることが分かりました。池に落ち葉やゴミがたまったり、周囲から流れ込む汚れによって水がにごったりすると、水の中の酸素量が減り、生き物が暮らしにくくなってしまいます。人間にとっては、ほとんど気づかないような変化でも、水の中で生きる生物にとっては、命に関わる深刻な問題であるということです。つまり、私は知らず知らずの内に環境を破壊したり、生物が絶滅する原因となる行動をしている可能性があります。

また、私は人間と水中生物の立場の違いについても考えました。私達は水が汚れても、浄水場で処理された安全な水を使うことができますし、環境が悪ければ別の場所へと移動することもできます。しかし、メダカのような水中生物は、水から離れては生きられないのです。水そのものが住む場所であり、命を支える全てだからです。池のメダカが消えてしまったという事実は、池の水がメダカにとって安心して暮らすことができる環境ではなくなってしまったという、人間の環境破壊の結果のよう感じました。

私は、「水」、「水不足」などと聞くと、人間を中心に考えてしまいが

会津若松市立第六中学校 三年 永井 花歩

ちですが、この「水中生物に与えられる影響」について考えると、人間の反省すべき点が浮き上がってきます。そして、私はこの今起きている「水中生物の危機」は、いつか「人類の危機」へと変化していくと思います。何故なら「水」は人間が発展していくために必要不可欠な資源だからです。つまり、環境破壊を続けるということは、未来の人類の首をしめるということになると思います。

私は、蛇口をひねればいつでも水が使える生活に慣れ、水の大切さを深く考える機会が少なくなっています。しかし、私達が使った水は必ず自然へ戻り、川や海を通して多くの生き物へつながっていきます。つまり、何気なく川などへ捨てたゴミが、巡り巡って水の環境を変え、生き物の命に影響を与えているのかもしれない。そう考えると、水を大切にしようと考えてことができます。

メダカが泳いでいたあの池の風景を、すぐに取り戻すのはきつと難しいです。けれど私は、水が無駄にしないことや、水を汚さない行動を意識して生活したいです。例えば、水を出しっぱなしにしないこと、再利用できる水は再利用する、水辺を汚さないことなど、一つ一つしっかり意識していきたいです。水を守ることは、水の中で生きる小さな命の居場所を守ること、そして人類の未来を守ることに繋がります。メダカの姿が消えた池をきっかけに、水と人間の関わりについて、これからも考え続けていきたいです。

優秀賞

猪苗代湖の未来のために

私は、「水」と聞いて猪苗代湖を思い浮かべる。なぜなら、小学生のときに猪苗代湖を清掃したり、水質調査を行ったりした経験があるからだ。この経験は、とても心に残っている。そして、私にとって一番身近にあるこの水は常にきれいさを保ちたいと思っている。

猪苗代湖は昔、水質が日本一だった。しかし、生活が便利になり生活排水が増えてしまったことなどをきっかけに水質は悪くなってしまった。このような現状から、水質を再び日本一に戻そうという目標で小学校では活動をしてきた。まず、猪苗代湖岸のクリーン作戦や水質を悪化させるヒシやヨシを回収した。全てとても大変な作業だった。しかし、ヒシ回収で二、三トンのヒシを回収することができ、やりがいも感じた。ヒシは毎年回収しているのに、次の年になるとまた元に戻っているの、毎年行うことが大切だと思った。また、水質調査を行う活動もした。活動をしていて猪苗代湖は場所によって水質が違うことが分かった。ヒシやヨシがある場所はもちろん水質は汚いし、海水浴場は比較的きれいである。どこか一つの場所がきれいなのではなく、全ての場所がきれいな猪苗代湖が良いなと思った。これらの活動をふまえて学習発表会で発表したり、町でこれらの情報を発信したりする活動もした。町で発表したときにはいろいろな世代の人がいて、良い意見交換ができたので良かった。これらの活動を通して、猪苗代湖の未来はみんなで協力して守るべきことなのだと実感した。自分で活動することも大事だけど、他の人に情報を発信してみんなで水質改善に取り組んでいくことも大事だと思った。また、これだけみんなで猪苗代湖の水に関わっていることを知り、猪苗代湖の水がどれだけ大事なのかということも実感することができた。このような活動のおかげで年々水質は良くなっているが、小学校や中学校が統合したことにより活動は減ってしまった。だからと言って他の団体がやってくれているのにも関わらず、自分たちでできる活動をやら

福島県立会津学鳳中学校 二年 渡部 心寧

ないのはどうかと思う。だから、自分たちでできる活動を率先してやらなければならないのではないかな。

猪苗代湖の水を守るためにできることはたくさんある。まず、生活排水について気をつけることができる。猪苗代湖は生活排水が主な原因で水質が悪くなってしまったからだ。だから、油をそのまま流さないことや、食べ残しを流さないことを意識するだけでも少しは変わらなと思う。次に、湖岸にごみを捨てないことだ。小学生のとき、湖岸クリーン作戦を行った。そのときに意外とゴミがたくさんあったので気をつけるべきだと思う。一人一人の心がけが足りないからこのようなことが起きると思うので、他の人への声かけも大切だ。小学生のときの活動を通して情報を発信して呼びかけることの大切さを学んだ。だから、家族などの身近な人からでも声をかけることはだれでも可能なので、大切にしたい。

私が猪苗代湖の自然学習をたくさんやってきた中で一番学んだのは、みんなで協力して猪苗代湖を守ることの大切さだ。猪苗代町のはこりである猪苗代湖を守るのには一部の人ではなく、みんなでやることである。だから、猪苗代湖の未来のために自分でできることをやったり、周りの人に呼びかけることを行いたい。そして、猪苗代湖についての見聞を広め、みんなで猪苗代湖の未来を守りたい。

入選

水と心のつながり

「水」。それは昔から地球上に存在してきました。私たち人間が生活していく上で欠かせない存在です。生命の維持や農業・産業の発展、水の向こう側にある国との交流。「飲むもの」「使うもの」として当たり前に関わってきました。ですが私はそれ以上に水がたくさんの人の心に深く関わっていると思います。

まず、「水」は人の心に癒しや安らぎを与えてくれます。疲れがたまっていた日に川のせせらぎの音や雨音を聞いていると、気持ちがリセットされ、前向きな気持ちになれるような気がします。環境音はストレス解消や睡眠の質の向上につながるというわれています。このように、「水」は目に見えない形で、人の心を支えているのです。

また、自然の「水」が作り出す景色に人々は心を動かされてきました。果てしなく広がる海や波のさざめき、穏やかな湖に映る空や山々の景色、力強く流れ落ちる滝。「水」のある景色はとても美しく、人の感情を豊かにしてきました。こうした景色を見て、自然の偉大さや生命の尊さを感じます。また、「水」のある場所は散歩や釣りなど、人々が集い、心を通わす場ともなってきました。季節の移り変わりにより表情を変える水辺の景色は良い思い出となり、心に深い印象を与えます。だからこそ、人は自然を大切にしようと思うのではないのでしょうか。

さらに、水は文化や芸術にも深く関わってきました。昔から、「水」は絵画や俳句、音楽や物語などたくさんのものに描かれてきました。日本では川や雨、雪など、「水」に関わるものは季節の表現として使われ、人々の創造性を刺激し、繊細な感情を表現する役割を果たしてきました。また、神社で手をお清めする手水のように、「水」は清らかさの象徴として信仰にも結び付いてきました。このように「水」は人々の想像力を育て、心の表現を手伝いながら、文化や精神の土台を支えてきた存在だといえます。

会津若松市立第六中学校 三年 佐藤 胡糸

一方で水は私たちに恵みを与えるだけでなく、様々な問題を引き起こします。大雨や洪水による水害は、人々の命や家、町などを一瞬にして奪いさり、強い不安や恐怖を与えます。また、工場排水やゴミによる水質の悪化が進むと、海や川は今までの美しさを失い、そこに暮らす生き物の生活場所がなくなってしまうたり、人々が癒しを感じられる場所ではなくなってしまうたりします。「水」は、使い方を間違えると命を奪うこともあります。今までは人々の憩いの場だったはずの水に近づきにくくなってしまっています。心を豊かにしてくれる存在だったはずの「水」は、心の豊かさを奪ってしまう存在になってしまっているのです。

だからこそ、私たちは「水」の恵みに感謝し、正しく使い守っていく必要があります。水は限りある資源であり、当たり前に使いつづけられるものではありません。一人一人が節水を心掛けたり、川や海を汚さないで行動したりすることが大切です。そうした小さな行動の積み重ねが、美しい「水」を守り、安心して暮らせる社会につながっていきます。

「水」を大切にすること。それは自然を守ることだけでなく、人々の安らぎや感動を未来へ残すことでもあります。私は「水」と共に生きていることを忘れず、これからも「水」を大切にしながら、暮らしていきたいと思っています。

入選

姿を変える水

世の中には、高級なジュースや甘い飲み物がたくさんある。しかし、私にとって世界で一番美味しい飲み物は、部活動の練習中に飲む「ただの水」だ。

バレーボール部の練習は、常に自分との戦いだ。必死に手を伸ばしても届かないボール、大きな音を立てて腕を弾く強烈なスパイク。思い通りにならないプレーが続くと、心のなかに焦りや苛立ちが溜まる。そして、いつのまにか驚くほどの大量の汗が吹き出し、ユニホームが重く感じられる。そんな時私は、タイムアウトの合図とともに、魔法の力を借りに行く。それは、ベンチに置かれた冷たい水が入った水筒だ。一口、二口と飲み干すと、喉の奥の熱がスツと引き、さっきまであつくなくなっていた頭が驚くほど冷静さを取り戻すのがわかる。私にとって部活動中の水は、単なる水分補給ではない。それは、焦って乱れた心のリズムを整えてくれるリセットボタン。水を飲むという行為を通して、私はコートの中の自分自身と向き合うことができるのだ。そして私は水とバレーボールに、一つの共通点があることに気づいた。それは、特定の型に収まらず、常に変化する環境に対応していくところだ。

水には決まった形がない。丸い器に入れば丸くなり、四角い器に入れば四角くなる。それでいて、岩をも砕く激しい勢いを持つこともある。どんな隙間にも入り込む柔軟さも持っている。

バレーボールも同じだ。相手がどんなに鋭いサーブを打つてこようと、予想外の方向にボールが飛んでこようと、その変化に瞬時に対応し、自分たちの形を作らなければならない。心「こうあるべきだ」と執着しているうちは、変化するボールを拾うことはできない。水のように柔らかな心を持つてこそ、どんなボールにも反応できるのだと気づいた。

また、水は常に高いところから低いところへと流れ、一箇所に留まることはない。この性質も、今の私には大切な教訓に思える。試合でミス

矢吹町立矢吹中学校 三年 須藤 旭

をしてしまったとき、いつまでもその失敗を悔やんで立ち止まっていたは、次のプレーに集中できない。ミスを「水に流す」という言葉があるが、それは単に忘れるということではなく、執着を捨てて、次の瞬間へ向かって流れ続けるということではないだろうか。一つのプレーが終わるたびに、一口の水を飲み、心を新しく入れ替える。そうすることで、私はミスを引きずらずに、また次のレシーブへと一步を踏み出すことができるようになった。

部活動を通じて感じる水のありがたみは、身体的なものだけではない。厳しい練習の中で、チームメイトと水を分け合い、共に汗を流す時間は、私たちの絆をより強固なものにしてくれる。水が乾いた大地を潤し、植物を育てるように、水は私たちのギスギスした心を潤し、チームとしての「一体感」を育ててくれるのだと思う。

私はこれからも、コートの中で水のように生きたいと思う。どんなに厳しい状況でも、自分の形にこだわらず、しなやかに変化し続けること。そして、激しいプレーの中でも、水のような静かな強さを心に宿し続けること。

練習が終わった後、空になった水筒を洗いながら、私は明日への自分を思う。今日飲んだ水が私の力となり、明日の私を支えてくれる。

水が教えてくれた「しなやかさ」と「リセットする勇氣」を胸に、私はこれからも、どんな高い壁も水のようにすり抜け、仲間と共に勝利という名のゴールへと流れ続けていきたい。

入選

生活に欠かせない水

私たちの生活の中でよく使う水、蛇口をひねると水が出る。そんなことが当たり前だと私は思っていた。今日も朝起きてトイレの水を流し、顔を洗って歯を磨き、朝ご飯のご飯や味噌汁、学校に持っていく水筒の麦茶など、行動の一つ一つが水に関わっていて何気なく使っていた。

お正月に、祖父から水の話聞いてみた。戦後や東日本大震災の話をしてもらい、今、こうして水があることは当たり前ではないということが分かった。祖父は、戦前に生まれ、今とは全く違う生活を経験していた。祖父の家には井戸があり、井戸からポンプで水をくんでいたそう。深さは五メートルくらいあって、井戸からは常に新しい水が湧き出ている。水をくむのは子どもの仕事で、腕が痛くなるほど大変で、特に風呂に水を入れる時はパイプをつないで水を入れるのが大変だったようだ。水が湧き出ていると言っても水は井戸に頼っていたから、井戸水は大事だった。隣の人たちは井戸のない家がいっぱいあったから、祖父の家の井戸に水をもらいに来る人もいたそう。水道は、祖父が中学一年生の時にでき、その時はなんと便利で、さらに水のありがたさを感じたと言った。そんな井戸水の経験をしていた祖父でも、東日本大震災の時には戦時以上に水が貴重だと感じる経験をした。祖父が住んでいるところは、地震の影響で断水し、蛇口をひねっても水が出てこなかった。水が出ないことで困っていると、近くの小学校に給水車が来ていて、何人かの人が同じようにポリタンクを持って並んでいた。タンクいっぱい水をもらったのはよかったが、歩いてきたために水が重くて運べず、軽トラに乗ってきた方に運んでもらったそう。そこにいる人はみんな水に困っている状況だったが、だからこそ、その時初めて会った人でもお互いに助け合うことができたのかと私は思った。ポリタンク二つ分の水は、主に料理や飲み水に使った。その他、生活に必要な水をいろいろな方法で使っていたことも聞いた。食器を洗う水を節約するために、食器にラ

いわき市立植田東中学校 二年 橋本 陸

ップをはってできるだけ洗わないように工夫していた。風呂は温泉に行き、トイレは風呂水と池の水を使ったようだ。祖父自身、震災の時ほど水のありがたさを感じたことはないと言っていた。また、祖父の時代は水との戦い。水の恐ろしさを知った話も聞いた。家の近くを流れる川が反乱して家の周りが水浸しになった。あと数センチで床上浸水するのではないかというところで水は止まった。夜に大雨が降っていて外を見ることなく家の中にいたが、ふと窓を開けてみたらあつという間に床下まで水があふれていて、水の怖さを知ったと祖父は語った。話を終えた祖父が、「一滴の水、よく生かしたし」と書かれた書を見せてくれた。祖父の母、私の曾祖母が書いたものだと言った。いつの時代も水を大切に考えられていることを感じた。

今は水道が発達しているから井戸を掘って水をくんでいる家はどこにもない。川に洗濯をしたら行ったりする人は今はいない。それは、水が生活の中でも大切で必要なものだから、水道が発達したと思う。また、家の水道だけでなく、ペットボトルで水が買えたり、コインランドリーで洗濯ができたりなど、水を手に入れたり、使ったりすることができ。しかし、「水には限りがある」。また、災害によって水が使えなくなってしまうこともあるかもしれない。祖父から水の色々な話を聞いて水のありがたさを感じた。水はいつもあるものと思っていたが、「有り難い」水を大切にしたいと思った。

入選

水と共存する私たち

私たちにとって、水は必要不可欠な存在である。日常生活でも、トイレ、お風呂、洗濯など、あらゆる場面で水を使っており、それが当たり前前の生活となっている。しかし、その「当たり前」がどれほど幸せで恵まれていることなのか、私たちは知らず知らずのうちに忘れてしまっているのではないだろうか。水が「当たり前」に使えることの幸せを、改めて考えなければならない。

六年前、台風の影響で、突然家の水が止まる時期があった。幸い、家は川付近ではなかったため、一週間ほどで復旧した。しかしこの出来事は、水のある暮らしを当然と思っていた私にとって、とてもつらい経験であった。生活に必要な水を得るため、水を汲みにスーパーへ足を運んだ。水の入ったタンクはとても重く、私一人ではとても運べるものではなかった。時間や労力をかけて得られた飲み水は、まるで「高級品」のように思えた。

水の節水のため、トイレは一度に流せず、手も自由に洗うことができない。お風呂や洗濯は、銭湯やコインランドリーに行く必要がある生活が続き、水がどれほど特別なものであったか身をもって知る機会となった。

世界に目を向ければ、アジアやアフリカなどの多くの地域では、インフラが整っていない。飲み水を得るために、険しい道を何時間もかけて水を汲みに行く人々。きれいな水を自由に飲めない生活。トイレも不足し、生きていくために水を求め、そのために学校へ通えない子供たちが世界中にいる。

環境面でも、私たちが出す生活排水のうち、八割以上が処理されずに河川や海へ流され、水質汚染が進んでいるという現状がある。私たちはこれらの事実を他人事ではなく、自分事として受け止める必要がある。そして、世界中で困っている人々のために、自分に何ができるか、真剣

に考えなければならない。そこで、私でもできる、身近で意識できることを考えてみた。

私たちの生活の中で節水を心がけるのはもちろん、生活排水を汚さない工夫は重要だ。例えば、油汚れはキッチンペーパーで拭き取ってから洗うことで、洗剤の使いすぎや、油が自然へ大量に流れ出ることを防ぐことができる。これらのことから、私自身が日々心がけていることは、水資源や水質汚染といった問題について知る努力も、欠かさず行っている。

水は限りある資源であり、世界中の人々が共有して生きている命の源である。だからこそ、私たち一人ひとりが小さな工夫を重ね、当たり前の日常を未来へとつないでいく責任を持ち続けることが大切だと考える。

いわき市立平第二中学校 二年 緑川 華

入選

強く美しい川

会津若松市立第六中学校 二年 皆川 叶磨

僕は毎年、曾祖母が住んでいた只見町へお墓参りに行く。只見町は水の郷と言われており、自然豊かな土地である。だが冬は、二、三メートルの雪が積もる寒さの厳しい豪雪地帯だ。そのおかげで雪解け水が豊富で、豊かな自然が育つ。

お盆にはいつも親戚が集まり、皆で川遊びを楽しむ。山から流れてくる水は底が見えるほど透明で冷たく、所々でこんこんと湧き出ている。たくさん生き物たちが棲んでいて、かえるの卵やおたまじやくし、どじょうや稚魚も泳いでいる。僕にとっては、小さいころからの思い出がつまった大切な遊び場だ。

あるとき、母は僕に小さな紫色の水晶を見せてくれた。わずか一センチくらいのそれは、きらきらととてもきれいに輝いていた。それは、母が小さい時に只見川で岩を削って採ったものだ。母は、お守りとしてずっと大切に持ち続けている。(あの川で、こんな凄いものがみつかるなんて)と、僕はとても驚いた。夏になったら採りに行こうと思い、母に聞いてみた。母は残念そうに「もう採れないかもしれないよ」と言いながら、あの年の出来事を話してくれた。

それは二〇一一年のこと。七月二十七日から三十日にかけて発生した新潟・福島豪雨。新潟県と福島県会津地方を中心に記録的な大雨となり、各地に甚大な被害をもたらした。

只見町では七、一ミリの総雨量を観測し、二十四時間最大雨量五二七ミリ、一時間最大雨量も六九・五ミリを記録した。只見川流域を中心に人的被害や住宅被害が発生し、JR只見線は橋が流出、国道二五二号線も道が寸断され、交通網にも大きな影響が出た。

曾祖母の家は奇跡的に被害を免れたが、近所では床上浸水などの被害が出たという。僕は初めて、この時の只見町の様子を母から聞くことになった。

曾祖母の家は誰も住んでいなかったが、被害の状況が心配で後日様子を見に入ったそうだ。只見町に着くまでにトンネルは雨で冠水した跡があり、道は土砂崩れで通れず迂回するなど、なかなかたどり着くことができず苦労したという。

ようやくたどり着いた曾祖母の家の周りは、田畑一面が河原のような状況になっていた。手をかけて育てていた夏野菜はすべて流され、もの凄いの土砂が山から流れてきたことが一目でわかった。

橋が流された川に向かうと、直径二メートル以上はあるかと思われる巨大な木が壊れた橋に引っかかっていて、茶色く濁った川が轟音を立てて流れていた。辺りの木々の樹皮は水や土砂の勢いで剥がされ、何本もが根っこごと流されていたのだ。川の中には上流から流れてきたと思われる大きな岩があり、川の流れがいかに激しかったのかを物語っていた。ただただ自然の脅威に立ち尽くすしかなかったと、その日のことを振り返りながら、母は話してくれた。

水の力は本当に凄い。自然の中では人間はちっぽけな存在だと思い知らされた。

豪雨のあと、川は整備され魚の群れはいなくなった。石の下のカジカも姿を消した。水晶が採れた岩も、もうない。母は小さな水晶を眺めながら、さみしそうだった。そして僕は、いつも遊んでいた川がもたらした災害を聞いて、初めて水の恐ろしさを知った。

それでも僕は自然と一緒に暮らしている。自然の恐ろしさも豊かな恵みも知っている僕達は、これからもずっと自然と共に生きていくのだ。僕が知っている今の只見川には、稚魚が泳いでいる、豊かな川が美しく透き通る魚の群れを育んでいるのを感じる。

今年の夏、僕は母と一緒に水晶を探しに行こうと思う。強く美しい川を、これからも大切にしていきたい。

入選

米づくりと水

柳津町立会津柳津学園中学校 三年 渡部 栞帆

私たちは一日にたくさんのお水を使っています。飲み水にしたり、花に水をあげたり、お風呂の水にしたりと、いろいろなことに水を活用しており、水は生活に欠かせないものになっています。水がなければ、私たちの生活は成り立たないと言っても過言ではありません。

私の町には、只見川が流れており、身近に水を感じる生活を送ることができています。しかし、もし当たり前のように使える水が思うように使えなくなってしまうたら、私たちの生活はどうなってしまうのでしょうか。

私の家では米を育てています。毎年秋になると美味しい新米を食べることが出来ます。私は、収穫したての新米を食べるのが大好きです。米を育てるには、たくさんのお水があります。まず、土を耕し、肥料をまき、代かきを行います。それと同時に、種もみから苗を育てます。そしてその作業の集大成として田植えを行います。夏の草刈り作業を経て、収穫の秋を迎え、美味しい米が出来ます。米作りは、「米」という漢字が表すように、八十八の大変な手間がかかるといわれています。その中でも、田んぼの水の管理が、稲を丈夫に生育させるためにはとても重要な工程となります。

私の祖母は、毎日田んぼの水の調節をするために、外に出かけていきます。毎日です。祖母の話のなかに、「今日は水をたっぷりとかけないといけない」とか、「今の時期は中干をするために田んぼに水を入れてはいけない」など、水の細かな調節に関する話がたくさん出てきます。それほど、水は稲を丈夫に生育するために大切なものなのです。

今年もいつものように米づくりが始まりました。しかし、今年は雨が降らず、只見川の水をポンプで汲み上げる水の量が制限され、いつもより稲の生育が遅くなっています。私は、雨が降らない原因の一つに、地球温暖化によるものがあると聞いています。地球温暖化によって、地球

上に極端に雨が多く降ったり、極端に少なかったりする地域があるというのです。今年の日本は、極端に雨が降らない時期が多く、このまま雨が降らない天気が続いてしまったら、さらに稲の生育に悪い影響が出てしまいます。それが原因で、収穫できる米が少なければ、美味しくないのであれば、それが原因で、収穫できない米が出てくるかもしれません。そして米が多く収穫できなければ、米の価格も高くなってしまいうでしよう。また、もしこのまま地球温暖化が進んでしまえば、さらに水は少なくなり、いつか食事の時に米が食べられなくなってしまうのではないかと本当に心配です。このように水不足は私の家の米づくりばかりでなく、世の中全体に大きな影響を及ぼしていくのです。今年は町中で節水呼びかける表示を見たり、防災無線から節水を呼びかける放送を聞いたりすることが多く、米づくりへの影響ばかりでなく、日常生活への影響を感じることが多くなっています。

地球温暖化の原因は、私たちが自分の生活を便利なものにするために、私たちが自身が引き起こしたものと云えます。そのため、私たちは生活を見直す行動を起こさなければなりません。現在世界中で、私たちの行動様式を変えて持続可能な生活を送るため、SDGsを意識した行動に取り組むように呼びかけられています。私は今まで、なかなかこれを実践した生活について深く考える場面がありませんでした。しかし、今年の身近な水不足による生活の影響を経験し、SDGsを意識した生活を送ることがとても大切であると強く感じています。これからは、毎日の節水など、私たちの少しの努力が、地球に優しい行動になることを自覚し、できることから取り組んでいきたいと思っています。

第４８回「全日本中学生水の作文福島県コンクール」の概要

第４８回「全日本中学生水の作文福島県コンクール」は、県内の中学校１１校から５３８編の作文の応募があり、その中から入賞者１１名、学校賞５校を選定しました。

<応募作文数>

(単位：編)

中学校名	2学年	3学年	計
会津若松市立第六中学校	13	18	31
石川義塾中学校	22	13	35
いわき市立植田東中学校	13	11	24
いわき市立平第二中学校	30	14	44
郡山市立大槻中学校	1	0	1
郡山市立第二中学校	0	1	1
須賀川市立第一中学校	39	25	64
磐梯町立磐梯中学校	1	3	4
福島県立会津学鳳中学校	59	0	59
柳津町立会津柳津学園中学校	1	1	2
矢吹町立矢吹中学校	134	139	273
計	313	225	538

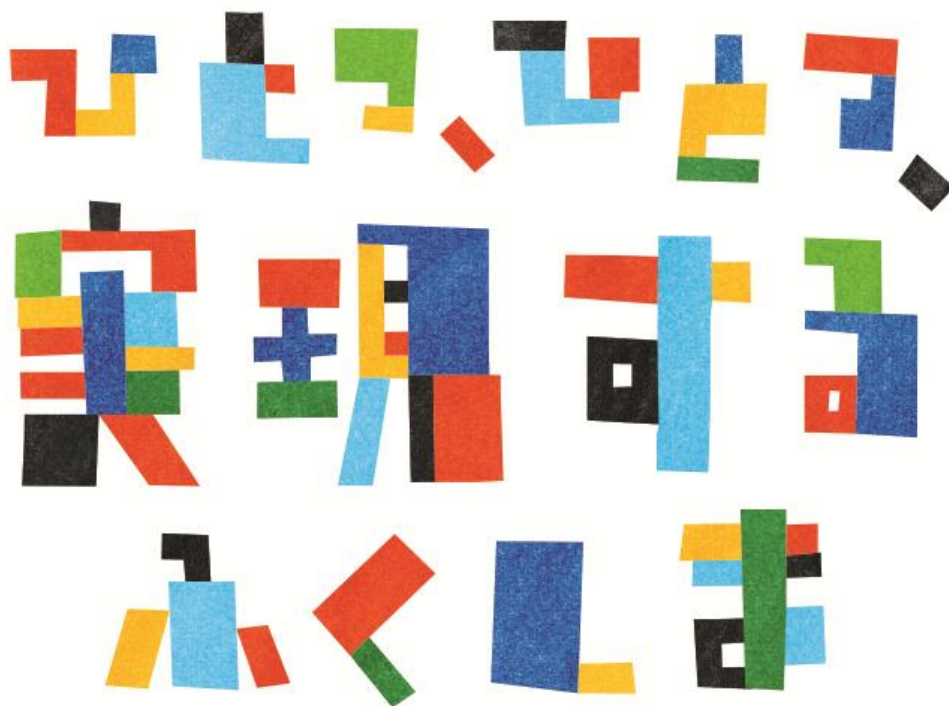
(５０音順表記)

<学校賞の授与>

学校賞には、優秀な作文を多数応募した学校又はコンクールに積極的に取り組んだ学校を選定しています。第４８回「全日本中学生水の作文福島県コンクール」では、以下の５校を学校賞に選定しました。

会津若松市立第六中学校、石川義塾中学校、須賀川市立第一中学校、福島県立会津学鳳中学校、矢吹町立矢吹中学校（５０音順表記）

参加いただいた中学生の皆さん、そして御協力いただきました先生方に、厚く御礼申し上げます。



福島県企画調整部

土地水対策室

電話 (024)521-7123

HP: [福島県 土地水対策室](#) で検索



※ふくしまの水に関する情報を掲載しています。